

## ICTビジョン懇談会 基本戦略WG（第1回）議事要旨

1 日 時 平成20年11月20日（木）10：00～12：00

2 場 所 総務省 第1特別会議室

3 出席者（五十音順、敬称略）

- ・ 構成員：國領二郎（主査）、江崎浩（主査代理）、飯島一暢、岩浪剛太、太田清久、甲斐隆嗣、北俊一、資宗克行、塚田祐之、新美育文、野原佐和子、平出利彦、藤原まり子、宮部博史、森川博之、弓削哲也、渡辺武経、広池彰（佐藤構成員代理）、平野尚也（滝澤構成員代理）（計19名）
- ・ 総務省：小笠原情報通信国際戦略局長、河内総括審議官、阪本官房審議官、児玉情報通信国際戦略局技術政策課長、山田情報通信国際戦略局国際政策課長、吉田情報流通行政局放送政策課長、小笠原情報流通行政局コンテンツ振興課長、奈良情報流通行政局地域通信振興課長、淵江総合通信基盤局電気通信事業部事業政策課長、長塩総合通信基盤局電気通信事業部データ通信課長、渡辺総合通信基盤局電波部電波政策課長、齋藤情報通信国際戦略局国際戦略企画官
- ・ 事務局：谷脇情報通信国際戦略局情報通信政策課長、竹村情報通信政策課調査官、柴山情報通信政策課課長補佐

### 4 議事

#### （1）開催挨拶

小笠原情報通信国際戦略局長より、開催に当たっての挨拶が述べられた。概要は以下のとおり。

- ・ 総務省の情報通信部局として、包括的なビジョン、政策的なロードマップの策定に取り組むのは、2004年12月に当時の麻生総務大臣のもとでu-Japan構想を提言いただいてから4年ぶり。4年間の状況変化を踏まえ、忌憚のない議論をお願いしたい。

#### （2）主査の選出及び主査代理の任命

國領構成員を主査に選出し、國領主査より江崎構成員を主査代理に指名した。

#### （3）ICTビジョンの策定に向けて

事務局より、資料3-1「ICTビジョンの策定に向けて」及び資料3-2「ICTビジョン懇談会における検討アジェンダ（案）」並びに、本日欠席の会津構成員提出資料（資料4「ICTビジョン懇談会へのコメント」）について説明を行い、これらを踏まえて自由討議が行われた。なお、会津構成員提出資料の概要は以下のとおり。

- ・ 今後の情報社会について考えていく上で、「消費者」という表現が果たしてふさわしいのかどうか疑問。特に政策の立案・形成プロセスにおいて、先進的な利用者、あるいはネティズンを中心とした主体的な市民の意見を受けとめることが重要。
- ・ ユーザー、利用者も最初から対等な主体として参画する、「マルチステークホルダー」の仕組みを十分深化させることが求められている。

資料3 - 1、3 - 2及び4の説明を踏まえた自由討議における、各構成員の発言概要は以下のとおり。

- ・ 今回の構成員の中にエンドユーザーがいない。エンドユーザーをはじめとしたマルチステークホルダーを産業界にどう引き込むかが重要。政府の政策を作る際の考え方として、縦割りをどう排除するのが大事。
- ・ グローバル社会に対する我が国のポジショニングと役割を明確に出すべき。ビジネス展開におけるグローバル化もあるが、政策的にいかに日本の役割をグローバルの中に位置づけるかも戦略。

江崎構成員より、資料5 - 1「今後のICT施策の方向性に関して(私案)」について説明を行い、これを踏まえて自由討議が行われた。江崎構成員説明の概要は以下のとおり。

- ・ 基本戦略に対する問題意識は、人材、標準化戦略、環境とエネルギー、グローバルコーディネーション、放送・通信融合、コンテンツ流通、情報管理、無線接続ノード、光ファイバーアクセス網の寡占化、情報の共有と解析、の10点。
- ・ 問題意識に対する基本戦略の軸は、ステークホルダーとしてのチェック機能の導入、グローバル化のメリットの世界への発信、競争政策から機械創出政策への転換、政府の直接介入から間接的支援への移行、ガラパゴスとの関係と日本に世界の研究開発センター的なポジショニングを持たせるということ、の5点。

資料5 - 1の説明を踏まえた自由討議における、各構成員の発言概要は以下のとおり。

- ・ 今の競争政策が、技術イノベーションを止めることがないようにすることと、合理化による価格低下で新サービスの創出を目指すことが目的だとすると、がんばって新しくマーケットインできるような仕組み作っていくという形にすれば、機会創出政策とも呼べるのではないかと。
- ・ 重要な観点として、戦略の連携、つながり、連続性といったものが必要。ICTの国際戦略を考えた場合、国内での利活用、標準化、人材育成などとも関係がある。こういったものの連続性が、最終的にまとめられるロードマップなどではっきり分かるようになればいい。
- ・ 今回のビジョンで重要な視点は、何を「民」と捉えるか。日本の技術が世界標準になるための標準化戦略は非常に重要。民間が開発することも重要だが、標準化を議論する海外の場での発言力強化、人脈強化、ポジションアップの積み重ねが重要。国際会議における発言等の実績を積み重ねることによって、様々なレイヤー全体で強くなれるのではないかと。そのためには、国内にそういうことを支援する、携わる人材を増やす、といった環境を作ることが重要。
- ・ 今回のビジョンの中にある、ファンダメンタルズの強化は重要。「技術」は、研究所でできる技術や、既にある技術だけでなく、それを売り込む企画力、マーケティング力といったものも含む。今までの「技術」に入っていないものを強化することが必要。
- ・ 海外からの留学生が本国に帰ると重要なポジションにつくことを考えると海外人材を積極的に受け入れることも重要。
- ・ 世界の地域別の戦略と人材育成はセットにやる必要があるかと。相手国でどういうニーズがあるのか考えられる人が必要。

- ・ 個別の国に支援していくためにはバイラテラルな手法をとらざるをえないが、我が国の途上国支援はマルチ。我が国のODAのあり方を検討することが必要。
- ・ 標準化で一番問題なのは継続性であり、国として発言できる人をどう確保するかを考えることが必要。
- ・ 標準化戦略を人材育成と絡めるのは賛成。そのために国としてどういう支援をしているのか考えておくことが必要。
- ・ ICT人材の育成については、中枢を担う人材をどう育てていくかも重要。最先端を生み出す土壌、層をどう確保していくか。義務教育レベルからどこまで教えるのかも考えなければならない。
- ・ 地域活性化の面も含めて、広島では大学から工業高校、小学校まで連携して教育している。いくつかの例はあるのでそれを制度化してみるのも一つの方法。

太田構成員より、資料5-2「2015年CarネーションからIシティへ ローカル密着がグローバル競争力の源泉」について説明を行い、これを踏まえて自由討議が行われた。太田構成員説明の概要は以下のとおり。

- ・ 2015年の我が国は「CarネーションからIシティ」。自動車を前提とした工業化社会から、ICTを活用し個人が自分の住んでいる場所に対し愛を持って密着できる、そういう楽しみができる、プロダクトプッシュ（供給先行型）からカスタマープル（需要主導型）へ大きく展開する可能性がある。
- ・ ICTのグローバルな国際競争力を突き詰めて考えると、地元で暮らすことを楽しむためのICTであり、地域での過ごし方、住まい方、高齢化社会への対応といった面で、世界に対してショーケースのような形を示すことができればいい。

資料5-2の説明を踏まえた自由討議における、各構成員の発言概要は以下のとおり。

- ・ Iシティの形成主体は必ずしも通信事業者である必要はなく、地元商業者がMVNOを利用したり、ケーブルテレビ各社がやるなど、主体は誰でもよく、サービスを提供する仕組みができればいい。地理的範囲は車で15分で駆けつけられる程度とすれば、日本全国で1000箇所程度になる。
- ・ 電気自動車により内燃機関がなくなると車が家に入り、建物の構造が変わる。今までのインフラはトランスポーターション（移動）を基本に考えられているため、都市設計自体が変わるのではないか。そういったビジョンは次のステップとして面白い。
- ・ 国の言う過疎地以外にもデジタルディバイドは存在しており、市内の中にISDNがあったりする。そういったところはエリア密着のケーブルテレビ会社にがんばって欲しいが、体力がなくてがんばれない。地域WiMAXも制度としては素晴らしいが課題も多い。
- ・ 実現したい町のイメージから、そのためのツール（手段）基盤がいろいろ考えられる。

北構成員より、資料5-3「ガラパゴスからの脱出～ICTビッグバン」について説明を行い、これを踏まえて自由討議が行われた。北構成員説明の概要は以下のとおり。

- ・ 本当の意味で世界羨望のICT社会を実現するためには、共通の目指したい姿、夢のあるゴールとしてのビジョンを打ち出す時期。新しいプレーヤー、ビジネス、価値が生まれてくるためのもう一つの仕組み、仕掛けをきちっと考えていくことが必要。個別に

ブレークダウンした取組みも、全体最適になるように、目指すべきある程度の姿、ビジョンは共有化しておくことが必要。

- ・ グローバルで起こっている、固定・移動通信、各レイヤー、国境をも越えた、多様なプレーヤー間の競争で日本は世界に勝っていけるのか。我が国の強みである携帯電話において、エンタメ（娯楽）系のコンテンツはもちろんのこと、生活・社会インフラ系に関するものも作れるかもしれない。我々の生活、産業、社会の各局面にICTがしみ込んでいる、こういう地に足のついたソリューションはおそらく世界に通用する。これをもってまさに世界羨望のICT社会が実現できる。
- ・ ガラパゴスから脱出するための取組は、完全デジタル元年までに、必要な法制度等を整える、できるだけ全国どこでもICTが浸透する世界を実現する、グローバルなデファクト標準も組み入れる、海外プレーヤーに門戸を開く、日本のプレーヤーも、世界を前提にして事業ドメインを定義する、社会、産業、生活の各局面に深く浸透させる、影の部分にも真正面から取組む、の7点。

資料5 - 3の説明を踏まえた自由討議における、各構成員の発言概要は以下のとおり。

- ・ 夢のある将来像、ビジョンの共有には大賛成。ICTの利活用が進むためには夢の世界がいきなり実現するのではなく、従来型の社会がいったん壊れる必要があるため、その先の社会を見せることが必要。各年代にマーケットを引っ張る人たちがおり、そういう人たちを上手く使いながらやっていけばいい。
- ・ 需要先行型ICT企業の像をしっかりと描き、そこにいくまでにどうあるべきかを考えることが必要。今の法制度はICTを前提としないところで出来たものであり、未来像を描いた段階で、課題を洗い出し、検討を盛り込んでいくべき。
- ・ 夢の世界実現のために法制度の整備は必要。しかし影の部分がわからないと必要な法制度はできない。その影の部分の話をしないと、夢は描いたが落とし穴があったということになりかねない。
- ・ デジタルネイティブ世代は重要だが、その世代に対する我々の教育責任はなおさら重く、どうやって若者の教育環境を作るか、グローバルな環境で生き残っていくための教育戦略を考えることが必要。
- ・ 影の部分には個人情報や有害情報だけでなく、携帯電話を落としたときのリスクヘッジ等、社会全体が一定の方向に方向転換していくことで起きる、想像もしなかったリスクまで想定すべき。ステレオタイプなリスクだけでなく、様々なリスクを洗うことが必要。
- ・ 今の世界のパワーバランスは米、欧、中になってしまい、全てに日本がでていくことは難しいため、「ここは」というところに出ていくべきではないか。分野や、アジアでの連携など、何か的を絞るべき。
- ・ 将来どういう生活が可能であるかというビジョンを作るのは大切だが、あるレイヤーのある資源を持った人たちの人格、野望など人間的素養が大きく将来を揺るがす可能性がある。グローバルな競争に勝つことは重要だが、グローバルなプレーヤーとして必ず備えておくべき資質、求められる人材の質、ルールについても考えることが必要。
- ・ ネットワークに関するルールもまだ整備されているとは思えず、プラットフォームに

関しては大変大きな問題に直面している。そこで日本が示すことのできる見識、価値観は技術面でのデファクトスタンダードをとるのと同じくらい価値がある。

事務局より、資料3 - 3「ICTビジョン懇談会の今後の進め方について」について説明を行い、これを踏まえて自由討議が行われた。各構成員の発言概要は以下のとおり。

- ・ 全体的に安心・安全が求められている。情報をどう管理し、どう安全にするか。自己責任という話もあるが、そういった視点も中にいれて検討を進めたほうがいい。弱者の視点も忘れてはいけない。
- ・ 国際的なレベルでは安全保障の話があったが、国内的な問題もある。

以上